

日米、「エアボーン26」で共同空挺作戦能力を強化 *U.S., Japan strengthen joint airborne operations during Airborne 26*

March 17, 2026

By Airman 1st Class David S. Calcote
374th Airlift Wing Public Affairs

3月2日から4日にかけて、陸上自衛隊東富士演習場で実施された人員降下訓練「エアボーン26」で、米空軍と米海兵隊のC-130J輸送機部隊が陸上自衛隊第1空挺団と共同演習を行った。

「エアボーン26」は、米空軍と陸上自衛隊が連携して行う最大規模の年次スタティックライン降下訓練および空中投下演習である。本訓練は、日米の共同空挺作戦能力を強化するとともに、米軍の乗員と自衛隊の空挺隊員との連携向上を目的としている。

本演習では、米空軍第36空輸中隊のC-130Jスーパーハーキュリーズ5機と、第152海兵空中給油輸送中隊 (VMGR-152) のKC-130J 1機が横田基地を拠点に運用された。これらの航空機は、昼夜にわたる空中投下任務を通じて、陸上自衛隊第1空挺団の隊員約180人の空挺降下を実施するとともに、コンテナ投下システム (CDS) 約70個の物資投下を行った。

第36空輸中隊任務指揮官のジェイソン・カッサー大尉は、「この演習は、大規模な空挺作戦を安全に実施するうえで、航空機乗員と空挺隊員の間で高度な連携が不可欠であることを示している。陸上自衛隊のパートナーと訓練することで、手順をさらに洗練させ、共同空挺任務を遂行する能力を強化できる」と述べた。

「エアボーン26」では、人員の降下投入と物資の空中投下を組み合わせた作戦を通じ、相互運用性の向上と運用即応態勢の強化に重点が置かれた。同訓練では、装備準備、安全点検、投下手順の確認など、飛行前から綿密な調整が行われた。

この調整された飛行運用は、日米両部隊が大規模な人員降下作戦を計画・搭載・実行する能力を示すものであり、空挺作戦で隊員や物資を安全に投下するために航空機クルーと地上要員の緊密な連携が不可欠であることを改めて示した。

第152海兵空中給油輸送中隊のKC-130Jパイロットであるサマンサ・ウェブ-マーティン大尉は、「地域の安全と安定は共通の責任であり、自衛隊や米空軍のパートナーと共に活動することは極めて重要だ。共に訓練することで、統合チームとして行動する能力が強化され、危機が発生した際にも迅速かつ効果的に対応できる態勢を整えることができる」と語った。

この演習にはほかにも、ジャンプマスターを派遣した米陸軍第358民事旅団、ジャンプマスター支援および降下地域管制を担当した第353特殊作戦航空団、航空機動連絡官を提供した第3海兵遠征軍 (III MEF) などが参加した。

「この演習に参加したことで、KC-130Jが大規模な統合部隊作戦に即応できる能力への確信をさらに深めることができた」と、ウェブ-マーティン大尉は演習を振り返った。

